



5月末実習に戻る

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

薬理学の試験が終わった次の週から5週間の実習に入った。実習中は往復2時間以上の通学時間が短縮される分、負担が軽くなる。でもそれ以上に久しぶりに現場に戻れるのがうれしかった。

今回は病院内の母子室、産科病棟、助産婦外来、産科医クリニック、母子室を1週間ごとに回る、というなかなか落ち着けない実習になりそうだった。

母子室は既に数週間実習経験があるので、自分で主体的に仕事ができただが、次の産科病棟は初めてで戸惑った。入院しているのは妊娠悪阻、妊娠中毒症、薬物中毒、切迫流産の危険がある人など。実質4日のこの実習では、大学で理論を学んだばかりの「妊娠中毒症」の疑いがある妊婦2人に絞ってケアすることにした。初日一緒に仕事をしてくれたエマは、仕事でいろいろ質問をしてくる。自分の知識に大いに不安がある私は、彼女の質問攻めにすんなりと答えることができず、手を焼いた。エマは「私をしつこいっていう人もいるけど、学生にはもっと疑問を持って勉強してもらいたいからうさく質問するの。ルーティンにやられていることでも『どうしていまこれをするのか』っていちいち考えてやらないとだめよ」と。もっと資料を読んで知識をつけなくては、と反省した。

次の3日間病棟の中で多分一番若いジュリーと仕事をした。ジュリーは私が迷っていないか気配りしてくれるし、必ず私の疑問には

手をとめて丁寧に答えてくれる。全般に若い助産婦たちはつい最近まで自身が学生だったということもあり、学生に対してのアドバイスも的確だし、仕事がしやすい。

次の実習先は病院内の助産婦外来。普通、妊娠中のケアは地域の助産婦が開くクリニックで行なわれるのに対し、助産婦外来は平日の日中予約なしで利用できる。分娩監視装置が3台あり、病院内なので、診療所で働く助産婦や一般医から紹介されるケースも多く、毎日15人ほどが訪れる(GTTの採血に来た人、高血圧のためモニターに来た人、腹痛を訴える人、出血があった人、破水がないか確認に来た人、胎動が減ったのではと心配して来た人など)。たいていは問診、触診、分娩監視装置で安心して帰るが、中には医師の診断を頼み、入院となるケースもあった。朝は極端に忙しく、今まで実習で経験したことも違っていて、仕事を理解するまで混乱した。そして、やっと慣れた頃に実習が終わってしまった。またいつか戻って来ようと思う。

2か月後に卒業の3年生は大学の方(授業、小論文や卒論)が終わり、あとは実習数週間を残すだけ。実習の数(分娩介助40例、母子のケア100例など)がまだ足りていない人も焦ってはいない。就職先はほとんどが実習先の病院にしたようだ。皆自宅から通うし、新卒で新しい環境、スタッフ、プロトコールに入っていくのは自信がないから、とある学生は言っていた。